古文を読むために　4

ここでは助動詞を扱っている。助動詞は数も多く、意味や活用も複雑で、文意に重要な役割を担っていることが多い。つまり、助動詞を自由に理解できれば、ほとんどの古文を現代語訳することができると言ってもよい。助動詞の体系全体を頭に入れれば問題はないが、一部だけを丸暗記するのはなかなか至難の技である。初めのうちは、同じ助動詞といっても頻度が相当に違うので、よく出てくるものから身につけるとよいだろう。せっかく覚えても高校の段階ではめったに見かけないものもあるからである。ある程度身につけたら、後はそれ以外のものを機械的に学んでいけばよい。

では、実際に助動詞を身につけるにはどのようにすればよいのだろうか。助動詞は次の三点から押さえて認識することが必要である。

1　どのような語あるいは活用形に接続するのか。
2　どのように活用するのか。
3　どのような意味を表すのか。

ほとんどの助動詞の活用一覧表でもこのような観点から助動詞を見分けられるようになっている。慣れるまでは常に手元に付録の助動詞一覧表を用意しておいて確認しながら、古文に当たるのがよいだろう。

助動詞

用言や他の助動詞に付いていろいろな意味を加えたり、主として体言について述語としたりする働きを持つ、活用のある付属語を助動詞という。いくつかの助動詞が連続して用いられる場合には、その順序に一定の法則がある。使役→受身→打消→完了→過去、完了→推量、打消→断定→過去などの流れがある。例えば、過去の助動詞「けり」には終止・連体・已然形の三活用しかないが、これは未然形接続の打消・推量・受身・使役の助動詞はこの下には接続しないということである。「けり」で表された過去の事態を否定したり、推量したりすることはないからである。連用形がないのも、過去の事態に、さらに完了とか過去とかが付くことがないからである。係り結びも含めて文を終止する位置に置かれることが多い助動詞は当然のことながら、終止形・連体形・已然形があれば事足りるのである。一方、未然形以下命令形まで六活用全ての活用をする助動詞（受身・尊敬・使役・打消・完了・断定・比況など）は活用形に具わる全ての機能が表現可能であるということである。納得できないと理解が進まない生徒にはこのようなことから始めて、助動詞全体の活用表の特性を捉えさせるとよいだろう。また、助動詞を学ぶ際には助動詞相互をなるべく関連づけて学ぶことで微細な意味を区別していることを理解することができる。

◎過去の助動詞

教科書にあるように直接体験過去の「き」と伝聞など間接体験過去の「けり」との違いを理解しておく必要がある。これは、「けり」が、ある事柄で話し手が今まで気づかなかったものに初めて気づき、なるほどこうなのだと合点したり詠嘆したりすることを、断定を避けて述べる場合に用いられたのが原義で（気づき

の「けり」などという）あり、次に、この詠嘆の意が強く出される場合にも用いられ、また、この「けり」がもともと断定を避けた表現であるところから、話し手が体験しない事柄、伝聞した事柄に対して述べるようになったことによっている。また、「き」はカ変・サ変には特別な接続をするので、出てきた時には丁寧な解説を心がけたい。

◎完了の助動詞

完了の助動詞には、その語自身の中に動詞の「あり」を含む「たり」「り」、ナ変動詞「去ぬ」を語源とする「ぬ」、動詞「棄つ」を語源とする「つ」がある。「たり」「り」はラ変動詞を含むのだから、ラ変活用をし、その元の語の意味、存在を含む完了となる。「ぬ」と「つ」は、その元の動詞の意味を含意して、「ぬ」は自然推移的な動詞に、「つ」は作為的な動作に付くという差がある。「つ」「ぬ」が「べし」「む」「まし」のような推量の助動詞と共に用いられると強意（確述）という強めの用法になる。「り」は四段の已然（命令）形とサ変の未然形にしか接続せず、他は全て連用形接続である。

◎打消の助動詞

活用が複雑であることに注意する。正しく識別さえできれば、意味は現代語にも通じるので理解しやすい。

◎推量の助動詞

推量の助動詞はそれぞれが付く活用形によって意味を考えることができる。すなわち、未然形に付くものは、いまだ実在していない事柄を推量しようとするものであり、連用形に付くもの（「けむ」）は過去の事態についての推量、終止形に付くものは、一つの完成体として表現された事態をあえて推量的に表現しようとするものという違いがある。種類の多い終止形接続のものは、視角による推量の「めり」、聴覚に基づく推量の「なり」、確かな根拠による推量の「らし」、強い確信をもっての推量の「べし」、見えない現実に対する推量の「らむ」などがある。これらは現代語ではそれに相当する助動詞がないものも多く、副詞的表現を補って理解しなければならないものである。終止形接続に限らない推量の助動詞全体を見れば、この他にも教科書にあるような「けむ」「らむ」「む」の関係や「む」「べし」「じ」「まじ」の関係などもあるので、さまざまな角度から関連づけて押さえると知識が定着しやすいだろう。「む」については意味の判別をする際に一人称の文に用いられている時は意志、二人称は勧誘、三人称は推量という目安を考えることもできる。また、「む」が仮定・婉曲の意味となるのは連体形の場合だけで、仮定の時は下に「は・こそ・も・が・に」などの助詞が来ることが多く、婉曲の時は下に体言があるか、または省略されている場合が多い。婉曲は現代語訳を無理にする必要がない。また、「むとす」（「と」は助詞、「す」はサ変）が熟合した「むず」という「む」をやや強めた助動詞がある。「まし」は「…せば～まし」「…ましかば～まし」という形でよく用いられ反実仮想（「もし…であったら…だろうに。実際は…ではないから…ではない」と訳す）を表す。

◎断定の助動詞

「なり」「たり」があるが、比較すると「なり」は自然的、永久的であり、「たり」は人為的、一時的という傾向がある。また、断定の助動詞は体言に接続することがあるのも注意を要する。

◎受身・使役の助動詞

助動詞の中でも、「る・らる」「す・さす・しむ」については他の助動詞とは扱いが異なる点がある。これらの助動詞が補助動詞「給ふ」と併用される場合、「給ふ」より上にこれらの助動詞がくる。しかし、他の助動詞にはこのようなことはない。受身や使役の表現は、能動と受動、命令者と被使役者という話し手の外界の捉え方に関わる表現であって、話し手独自の表現ではないことと関連がある。また、受身・使役の表現では、その文の見かけの主語はその動作の仕手ではなく、別に実際の動作の仕手がいるのであり、「る・らる」の自発・可能・尊敬の意味の主語、「す・さす・しむ」の尊敬の意味での主語が実際の動作主であるのとは違ってくるということもある。補助動詞「給ふ」がこれらの助動詞の後に来るのも、「る・らる」「す・さす・しむ」の付いた動詞連語が全体として一つの動詞のように意識されたということの反映であろう。そして、ここに属する助動詞は全て未然形に接続する。

「る・らる」は動作・作用の自然発生的・無作為的であることを示すことからいくつかの意味が生まれている。意味の見分け方についても触れておこう。古文においては無生物が主語になった場合の受身の表現は極めて少ない（ないわけではない）。また、それと区別しにくい尊敬の場合は尊敬の意を表す動詞の下に添えられることが多い。ところが、「る・らる」の下に尊敬の「給ふ」が付いた場合は受身か自発の意味となる。さらに、可能は平安時代では打消か反語の表現の中で用いられるのが普通である。それ以外の場合が自発になるが、自発は心情を表す語（思ふ・嘆く・泣く・眺むなど）とともに用いられることが多い。いずれにしても区別しにくい場合もあるので、前後の文脈も考慮しながら考えていく。「す・さす・しむ」は人為的・作為的に他に働きかける意を表す。単独で出てくる場合は使役である。尊敬の意を表す語とともに用いられると尊敬の場合が多いが、例外も多くある。「す・さす・しむ」を取っても文意が変わらなければ尊敬、文意が通じなくなれば使役という見分け方をする場合もあるが、これも絶対そうだとは言い切れない場合がある。

その他、**願望**「まほし」「たし」や**比況**「ごとし」の助動詞はさほど扱いにくくはないので、出てきた時に触れればよい。

初めにも述べたが、助動詞を正しく捉えることによって文意が理解されることも多い。品詞分解をして、一つ一つの助動詞の文法上の意味を確認し、現代語訳を当てはめて、逐語訳する練習を繰り返すとよい。慣れてくれば、そこまでしなくても現代語訳することができるようになる。いろいろなパターンに慣れることが大切である。

（畠山　俊）